

中国古文獻中のパンダ

荒木達雄

珍獣「熊猫」

パンダは現在中国の一般保護動物である。そしてパンダはその不思議な風貌と希少性のためにひろく世界にその名を知られている。

日本語でいうパンダは英語 (Giant Panda) 由来の名称であり、中国大陸で一般に使われる呼称ではない (なお、学名¹⁾ ラテン名は *Ailuropoda melanoleuca*)。漢語では「熊猫」「大熊猫」と呼ばれるのが普通である。

漢語ではこの「熊猫」という呼び名はいづごろから「Giant Panda」(パンダ)を示すものとして定着したのである¹⁾。一見して古くから使われているような印象のある語ではない。こころみに現在通行している現代漢語の辞典類を調べてみても、『漢語大詞典』『辞海』(一九九九年版)などの大型の辞典でも「熊猫」などのことばがつかわれた文献資料を提示していない。また、『辞典』も「猫熊」「大熊猫」「大熊猫」を「熊猫」の同意語として掲載している。一九三四年初版の『辞海』(一九六四年第十四版 台湾中華書局刊)では「熊猫」に以下のような解釈がつけられている。「熊猫 怪獣の名。新疆に産する。体はきわめておおきく、現存する怪獣のなかでもっともめずらしいものの一種。いまから

六十年前、フランスの科学者・比利大衛氏が発見した。一九二九年にいたり、アメリカのルーズベルト將軍の弟某が捕獲し、現在ではシカゴ原野博物館に陳列されている。この動物が何類何科に属するのかわからない。

文中にあらわれる「比利大衛氏」はフランス人ダヴィド神父（一八二六—一九〇〇）であろうと思われる。荒俣宏『世界大博物図鑑 ⑤哺乳類』（平凡社 一九八八年）にはこうある。「一八六九年三月、中国四川省西部を旅していた彼（ダヴィド神父＝荒木注）は、チェンルーの地主の家で白地に黒の模様のある大きな動物の毛皮を見せられた。」その後標本、毛皮を手に入れたダヴィド神父は翌一八七〇年に友人の動物学者ミルヌ＝エドヴァールに見せ、アライグマ科(2)に分類(3)した。

パンダを捕獲した「ルーズベルト將軍の弟某」は Kermit Roosevelt であると思われる。Theodore Roosevelt の次男であった Kermit は、一九二八年から一九二九年にかけて、シカゴのフィールド博物館 (Chicago's Field Museum) の動物、鳥類のコレクションのために兄 Theodore Jr. とともに雲南・四川両省をおとずれた。このときとらえた golden snub-nosed monkey と giant panda が、これらの動物がアメリカに持ち帰られた最初の例であるという。(4)

つまり、『辞海』の記事には一応事実が背景としてあるのだが、『辞海』の執筆者が事実をおおきく誤認してしまつたということなのである。その誤認の原因はわからない。「熊猫」という名称が訳語とされた理由もよくわからない。(5)ただ、この記述を見ると、「熊猫」の語は民国期にはまだ「パンダ」を指す固定されたことばとしてひろく認められてはいなかったようだと推測できる。実際のパンダの発見から六十年、捕獲から五年の間にどのような経緯でこのことが『辞海』の執筆者の知るところとなったのか、執筆者はどこまで現実のパンダのことを知っていたのかはわからない。しかし読者がこの記述から共通に現在わたしたちの思ひえがく「白黒の熊」を想起することができたとは思えない。大部分の人の脳裏で「熊猫」が「パンダ」と直結するような状態ではなかっただろう。

それでは中国の文献上でパンダに関する記述はどのようなようになっていたのだろうか。中国には古代からパンダがいて、

人と接する機会もあつたと思われる。しかしそれは「熊貓」の語であらわされているわけではなさそうだ。われわれはいったん「熊貓」というラベルから離れて、古代のパンダの姿を探しもとめる必要があるであろう。

現実のパンダ

まず生物科学分野の成果から、古代中国のパンダの生息状況を確認してみる。⁽⁶⁾

中国ではすでにいまから四百万年まえに現在のパンダの直接の祖先である「始熊貓」がいて、三百万年まえにはパンダがいたことがわかっている。重慶、四川、貴州、広西、湖南、湖北、河南、安徽、福建、浙江、陝西、山西、北京などで三百万年まえから一万年まえまでの期間のパンダの化石が発見されていて、パンダが広範囲に生息していたことがわかっている。氷河期を経てパンダの生存範囲はせまくなりはしたものの、依然として黄河以南の広い地域に生息していた。パンダの生息範囲が、現在の四川、陝西、青海の一部というごく限られた範囲になつたのは、おもに人口の増加と、それにとりまなう人の活動範囲の拡大によつて生じた森林伐採と動物乱獲によるものである。その規模は十八世紀以降急激におおきくなった。それでも十九世紀なかごろまでは湖北、湖南でもパンダの生息は確認されている。このような状況から、古代中国ではパンダと人との接触の機会があつたであろうと思われる。

伝説のはじまり

では中国の古文獻中ではパンダはどのように記されているのだろうか。そもそも文獻中でパンダに関する記述を見つけるにはどうしたらよいのだろうか。もちろん動物名が記載されている文獻を見なければならぬのだが、ただ「動物の名が記されている」ということならばその実例は無数にある。しかし記されている動物がどのような動物なのか（見たい目、習性、生息地などの情報）までわかるものとなるとおおくはない。文章の本筋に関係しないかぎり、いちいち動物

名に「これはどのような動物か」という説明をつけてくれることは期待できない。となると、動物についての解説をのせる自然科学系の本（子部医家類の本草書など）、文字の解釈を説明した本（経部小学類の字書など）、それに類書など、またはそれらにもとづいて書かれた文献などを中心に見ていくしかない。

まず『爾雅注疏』（晋・郭璞注、宋・邢昺疏）を見てみよう。卷十一 釈獸第十八に次のような記述がある。

獠白豹。注似熊，小頭庫脚，黑白駁七，能舐食銅鐵及竹骨。骨節強直，中實少髓，皮辟濕。或曰豹。白色者別名獠。音義獠亡白反。《字林》云，似熊而白黃。出蜀郡。一曰白豹。豹必孝反。《字林》云，似虎貝文。熊音雄。庫音婢。駁布角反。鐵佗結反。髓素累反。濕必亦反。疏獠，一名白豹。《字林》云，似熊而白黃出蜀郡。一曰白豹。

この「頭はちいさく足はみじかく、白と黒がまざりあつた模様、銅・鉄・竹をたべる」という部分はパンダの特徴と酷似している。つまりこの「獠」なる動物は、古代の中国人がパンダを見てそう呼んだと推測してよいのではないか。ただし注意すべきなのは、この資料は『爾雅』にパンダが記載されている「ことをしめすものではないことである。『爾雅』には「獠」が記載されているとしか言えない。言えるのは注釈者である郭璞が認識していた「獠」という動物がパンダであつた可能性が高い、ということのみである。

鄭樵（宋）もその『爾雅』注のなかで郭璞の解釈をうけついでいる。

獠白豹。音陌。似熊小頭庫脚，黑白駁。能舐食銅鐵及竹木。牙齒極堅□□，多以其牙託爲佛牙。

基本的には郭璞注をひきつぎ、そこに「牙齒」の説明を加えただけであることは明らかである（「竹骨」が「竹子」になつているが、内容に大きなちがいが生じるわけではない）。郭璞『爾雅』注、鄭樵『爾雅』注を見た後代の人はそれらの解釈をうけいれ（鄭樵の解釈は郭璞の延長上にあるわけだから、実質郭璞以来の解釈である）、「獠」とは熊に似た白黒模様の動

物である、と思うことになるわけである。

『爾雅』以外に「獐」について述べた文献はあるのだろうか。『十三経注疏索引』によれば、十三経のなかでは『爾雅』以外には「獐」は一度たりともあらわれていない。私の知る限りで、郭璞よりも早い時期に「獐」に言及した文献としては許慎『説文解字』がある。そこにはこのように記載されている。

獐似熊而黄黑色、出蜀中。从豸莫聲莫白切

この一文を見ただけでは、この動物がいったいなんなのか、判断することはむずかしい。また「黄黑色」とはいったいどのような色であるかもわからない。「蜀」はたしかに現在はパンダの生息地として有名であるが、先にすでに述べたように、パンダの生息域が四川などごく一部の地域に限定されるのはつい最近のことであるのだから、この時期の文献に「蜀にあらわれる」とあってもその動物が即パンダであることの有力な証拠とはなり得ないであろう。ところでこれら三種の資料、『爾雅』の注釈二種と『説文』を見比べてみると、『説文』の解釈は『爾雅注疏』の疏に引用されている『字林』の解説によく似ていることがわかる。⁽⁸⁾ 劉宋時期に成立した『字林』は『説文解字』の解釈を引きついでということであろうか。

『説文』『字林』の解釈からパンダを想起することはむずかしいが（記述が簡単すぎるので、パンダであるとも判断できず、さりとて絶対にパンダではないとも言えないのである。郭璞、鄭樵の「獐」と同じ動物を指しているのかどうかも不明）、郭璞、鄭樵の注からパンダの姿を思い描くことは容易であろう。しかしここにもやはりよくわからないことがある。それは「獐は銅・鉄や竹を食べる」の部分である。「竹」は問題ない。これこそがパンダの、ほかのクマ科の動物と異なる特徴である。⁽⁹⁾ では「銅鉄」とはなにか。いったい「銅鉄」を食べる動物などいるものだろうか。この「銅鉄を食べる動物」という概念はどこから生まれたもののだろうか。

この問いに関して、『文史雜誌』という雑誌に「竹箭与熊貓」というおもしろい随筆がある。このエッセーではおもに『山海經』によつて古代パンダの名称をさぐり、「猛豹」「猛氏」「白豹」「豹狍」「豹貍」「猛豹」などがパンダにあたる、と考えている。そこから「爾雅」「康熙字典」の「獾」は「獾豹」とおなじものを指すと推定している。では「獾」はなぜ「銅鉄」を食べると思われていたのか。「銅鉄」は本来「竹箭」とおなじことであるという。その理由は「青銅時代以来、銅で矢をつくっていたが、のちに鉄でもつくるようになった。パンダが『箭を食べる』という言いかたが、事情をよく知らない戦国期の人々につたわり、それが次々と誤つてつたえられ、『銅鉄を食べる』に変わった」からであるという。このエッセーの言うところを私なりに敷衍するところいうことだ。あるとき山で白黒の獣が笹(竹)を食べる姿を目撃した人がいた。その当時、矢は竹でつくっていた。そこでその人は「山に矢を食べる動物がいた」と言った。のちに矢の材料は竹から金属へとかわつた。材料の変化に應じて、「矢を食べる」の意味も「竹を食べる」から「金属を食べる」に変わったのだ。

この意見にはたしかにいくつか問題もある。文中では「青銅時代」というが、商代後期には青銅加工技術はすでに高水準に達し、各種の武器も鑄造できるほどだったといふ⁽¹⁾。となると、はやければこの時期にはすでに「銅を食べる動物」の誤解は生じていたことになる。もつとも青銅加工技術の進歩には地域差があるであろうから、必ずしも商代に青銅の武器が全土に普及していたことにはならないであろうが、「矢は銅か鉄」との思い込みが生じる時代までにはそれほど長い時間はかからないのではないか。郭璞が「獯」の注を書いた晋代までの間、ずっと「銅鉄を食べる」の誤解は保持されつづけていたのだろうか。その間この誤りは正されることはなかつたのか。その長い期間の「獯」について筆者はなにも語っていない。

この説を全面的に受け入れることはできないが、この「銅鉄を食べる」という記述は「誤つた伝聞」により生れたという説は注目に値する。私の知る限り、「銅鉄を食べる」という誤解が生まれた原因について、とにもかくにも考察を

皆南方獸

この動物の羅列に対して六臣注文選は多くの注をつけている。しかし「獾」については「白豹」と言うのみである。「獾、白豹」とは『爾雅』本文とまったくおなじである。注釈者は「獾」から「食銅鐵」を想起しなかったのであろうか。それとも「獾」は「食銅鐵」ではないと考えていたのだろうか。「食銅鐵」の説は知りながら、『爾雅』のみによってそのほかに解釈を加えようとしなかったということなのだろうか。その真意はいまとなってはわからない。

つぎに『神異経』の記載を見てみよう。⁽¹³⁾

南方有獸馬。角足大小。形狀如水牛。皮毛黑如漆。食鐵飲水。其糞可爲兵器，其利如剛。名曰齧鐵。《□黃經》云：南方齧鐵。糞利爲剛。食鐵飲水。腸中不傷璋。按，今蜀中深山亦有齧鐵獸。

ここでは『神異経』本文には注目する必要はない。本文に言う「獸馬」とはいつたいなにか。これもまた検証のむずかしい問題であるが、さしあたって今回の考察には関係ない。ここで注目すべきは注釈である。注釈は『神異経』本文の「食鉄」「齧鉄」の記載から「蜀の山の奥にも齧鉄獸がいる」ことを想起し、注記しているのである。この「蜀の齧鉄獸」は郭璞の「獾」と同じものなのだろうか。

こうしてみると、遅くとも六朝期には「蜀には鉄を食べる獸がいる」との印象は定着していたのではないだろうか。そして『文選』注のように、「獾」すなわち「鉄を食べる獸」と積極的に認めていない例もあるものの、六朝期以降、「獾は齧鉄獸である」との見方は優勢を占めるようになっていったようである。例として『太平御覧』⁽¹⁴⁾の「獾」の項をみてみよう。この項ではまず『爾雅』⁽¹⁵⁾（とその郭璞注）と『説文解字』からの引用を挙げ、つづいて『抱朴子』からの引用として以下の一条があげられている。

劉子知二負之尸。東方生識啖鐵之獸。實頼鳥禹之書、大荒之籍矣。

この一条にはもはやまったく「獏」の文字はふくまれていない。あるのは「啖鉄之獸」（「齧」ではないが）である。にもかかわらず、この一条は「獏」の項におかれている。この「鉄を食べる獸」と「獏」との同一視はその後もうけつがれていく。我々がこのことばにパンダの面影を見出すことは困難である。そして「鉄を食べる獸、獏」として知られていくにつれて、そのさまは「パンダ」からますます遠くなっていく。

獏界再編と合併と統合と

こうして六朝末、おそくとも隋ごろまでに「蜀にすむ鉄をたべる獸」というイメージを定着させた「獏」であるが、そのイメージはその後どうひきつがれたのだろうか。唐の白楽天に「獏屏贊 並序」という文があり「獏」についてこのように言っている。⁽¹⁶⁾（傍線は筆者。以下同じ）

獏者、象鼻犀目、牛尾虎足、生南方山谷中。寢其皮辟瘟、圖其形辟邪。予舊病頭風、每寢息、常以小屏衛其首。適遇畫工、偶令寫之。按《山海經》、此獸食鐵與銅、不是他物。因有所感、遂爲贊曰

邈哉奇獸、生于南國。其名曰獏、非鐵不食。昔在上古、人心忠質。征伐教令、自天子出。劍戟省用、銅鐵羨溢、獏當是時、飽食終日。三代以降、王法不一。鑠鐵爲兵、範銅爲佛。佛像日益、兵刃日滋。何山不剗、何谷不墮。銖銅寸鐵、罔有子遺。無乃餒而。嗚呼。匪獏之悲、惟時之悲。

獏は鉄や銅が主食なので、人が戦争のために鉄をつかい、仏像のために銅をつかってしまうものだから食べるものになくなって餓えてしまう、というのである。原因はことなるが、「人の森林伐採と動物乱獲」のために生息域が縮小し

た、という現実のパンダの状況とかさなるところもあつておもしろい。

ここで白楽天の言っている「獏」は、「銅や鉄を食べる」という特徴から、前代までの「獏」をひきついでいるとかんがえてよいだろう。そしてその特徴は「それ以外はなにもたべない」と誇張されている。さらに前代までになかった特徴として「象鼻犀目、牛尾虎足、生南方山谷中。寢其皮辟瘟、圖其形辟邪。」というものが加わっている。白楽天はこの特徴を知り、「獏」をえがかせることにしたわけであるから、「獏」についてこのようなイメージが定着したのは白楽天の時代よりももっとまえ、ということになる（なお、「絵にえがくと辟邪の効果がある」というのだから、そのいいつたえは想像上の獏の姿と不可分なものとして伝わっていたのであろう）。

このイメージがいつ誕生したのかはわからないが（隋唐期であろうが）、一過性のものでもなく、地域的なものでもなく、ひろく知られていったことはたしかなようである。宋の『埤雅』（宋・陸佃撰）の「獏」の項にはこうある。

獏、獸似熊、象鼻犀目、師首豺髮、小頭庫脚、黑白駁、能舐食銅鐵及竹、銳鬣、骨實無髓、皮辟溫濕、以爲坐毯、臥褥、則消膜外之氣、子从膜省、蓋以此也。 ……（以下略） ……

『爾雅』以来の「獏」と、白楽天がなんらかにもとづいて記した「獏」とがみごとに融合しているのがわかる。なお、これにつづく部分で、「蜀都賦」の「食鐵之獸」は「獏」であると断言している。

これにいた記載はほかにも見られる。ここでは宋・黄伯思『東觀餘論』¹⁷を見てみる。

跋藤子濟所藏獏圖後

按《山海經圖》南方山谷中有獸、曰獏。象鼻犀目、牛尾虎足、人寢其皮辟瘟。圖其形辟邪、嗜銅鐵弗食它物、昔白楽天嘗作小屏衛首、據此像圖而贊之、載於集中。今觀此畫、夷考其形、與《山海經》、《樂天集》所載同、豈非白屏畫迹之

遺范乎。

この三者に共通してあらわれる特徴は「象鼻犀目」であり、その皮には「邪をはらう」効果があることである。「埤雅」は「爾雅」の「獮」記述を襲い、さらにこれらの特徴を加えていることがみてとれる。黄伯思は『山海経図』によったと言い、『山海経』『楽天集』にも同じ記載があるという。白楽天も『山海経』の記載を参考にしている。⁽¹⁸⁾ 三者は「獮」にたいする認識をおなじうしていると考えてよからう。

この時点で「獮」に関する「伝説」がますます奇怪なものになっていくのがわかる。郭璞らの時代には「銅鉄を食べる」という非現実性をふくみながらも、多分に現実の動物としての特徴を残していた。竹も食べれば水も飲んだ。ところのちに「銅鉄を食べる」という特徴だけが強調されはじめた。「鉄を食べる」はそれを聞く人々に強い印象をあたえ、人によつてはこの「鉄を食べる」特徴のみを伝え、その他の特徴を捨象したこともあっただろうと思われる。「鉄を食べる」が「鉄のみを食べる」にかわってしまうのである。唐代に至るまでに、大部分の文人（『爾雅』『説文』『文選』などの文献に接する機会のある人々）は、「鉄を食べる」というその特徴にもとづき、空想をふくらませていったのではなにか。「鉄を食べる」という不思議な習性は「鉄を食べるのだからその歯は丈夫で不思議な力があるにちがいない」「その排泄物もほかの動物とはちがうものだろう」「毛皮にも力が宿っているはずだ」などのさらなる神秘的な特徴を想起させ、とうとうさまざまな神秘的な特徴をもつ空想上の動物になってしまったのだろう。唐宋期までにはおそらくはパンダに発するであろう「獮」は、すでに本来の姿から遠くはなれた動物になっていた。そしてこの共通認識はどうやら、今後もひろくうけつがれていくようである。

統合のフローカー

時代を明代にすすめて、李時珍『本草綱目』⁽¹⁹⁾の例を見てみよう。

獾 音陌。亦作貊。……釋名 時珍曰：按陸佃云、皮爲坐毯臥褥。能消膜外之氣、故字從膜省文。

集解 頌曰：郭璞云、似熊、頭小脚卑、黑白駁、毛淺有光澤。能舐食銅鐵及竹骨蛇虺。其骨節強直、中實少髓。或云、與《爾雅》獾白豹同名。唐世多畫獾作屏、白口有贊序之。今黔屬及峨嵋山中、時有獾、象鼻犀目、牛尾虎足。土人鼎釜多爲所食。頗爲山居之患。亦捕以爲藥。其齒骨極堅、以刀斧椎鍛鐵、皆碎落。火亦不能燒。人得之、詐充佛牙佛骨、以口俚俗。時珍曰：世傳羚羊角能碎金剛石者、即此物。相畏耳。按《說文》云：獾似熊。黃白色。出屬中。《南中志》云：獾大如驢狀、似熊、蒼白色。多力、舐鐵、消牛筋、其皮溫暖。《埤雅》云：獾似熊、獅首豺髮、銳鬣卑脚、糞可爲兵切玉、尿能消鐵爲水。又有嚙鐵、豺昆、吾兔、皆能食銅鐵、亦獾類也。並附之。

李時珍は「嚙鐵」「豺昆」「吾兔」を「獾」のなかまであるとみなしている。また王圻『三才圖會』⁽²⁰⁾にはこうある。

獾 南方山谷中有獸、名曰獾。象鼻犀目、牛尾虎足、身黃黑色。人寢其皮辟瘟。圖其形可辟邪。甜食銅鐵、不食他物。

ところで六朝までの「獾」には見られなかったものの、白堊天以降共通して見られる「象鼻犀目、牛尾虎足」。これは先に述べたような非現実的、神秘的な特徴に類するものとは言えないが、さりとてパンダの特徴でもない。この特徴はどこからきたものであろうか。

実はこの特徴は現在われわれが「獾（バク）」と呼んでいる動物のそれに非常に似通っているのである。『辞海』（一九九九年版）の「獾」の項にはこうある。

獾 ①哺乳綱、奇蹄目、獾科、獾属 (*Tarbins*) 动物的通称。型略似犀，但较矮小；尾极短；鼻与上唇延长，能伸缩。四肢短，前足四趾，后足三趾。栖息热带密林多水处，善游泳，遇惊即逃入水中。主食嫩枝叶。分布于马来西亚、印度尼西亚苏门答腊、泰国及中美、南美等洲。产于亚洲的为马来獾 (*T. indicus*)，背与两肋灰白色，头、肩、腹和四肢黑色。产于中美、南美的有美洲獾 (*T. terrestris*)，体型较小，全身紫褐色。肉可食。⁽²⁾

唐代以降の「獾」はバクの影響を受けているのではないか。これまでみてきたように、先に「獾」の名をあたえられたのはおそらくパンダであろう。一方で唐代以前にはバクもすでに人に知られていて、これもまた「獾」とよばれた。そして文献に記載する際に両者の特徴がまざった。こう推測できそうである。

もちろんパンダとバクを実際に見比べれば両者が異なる二種の動物であることは誰の目にも明白である。隋唐期に混同がおきたことは、先に述べた「獾」の空想化とおおいに関係がありそうである。

「獾」はパンダに由来するとはいえ、ほとんどの文人にとつては文字のうへの情報のみによる観念上の動物になっている。そのような状態ではじめてバクに接した人はなにを感じるだろうか。先の『辞海』の記述にあるようにバクの体の色は白と黒である。『爾雅』などには、白と黒の模様をもつ動物は「獾」である、と書いてある。そのために目のまへのバクと知識のなかの「獾」とをむすびつけることがあつても不思議ではない。先に私は「両者の特徴がまざった」と書いたが、これは当時の人の立場からすれば間違つた言いかたである。バクを「獾」と呼んだ人は、バクこそが古文獻に記載されている鉄を食べる動物「獾」そのものであると思ひ、そう呼んだのである。異なる二種の動物とわかつていながら同じ呼称をもちいたのではなからう。

しかし結果的にはパンダ（に由来する想像上の動物）とバクという二種の動物が「獏」という字を媒介にまざりあい、さらにその非現実性を増したことになる。さきにかかげた唐代、宋代の「獏」はおそらくこのようにしてできあがったものであり、当時の文人たちはこの「獏」が実は空想を媒介にした混血児であるとは夢にも思わなかったのだらう。

「獏」のみにあらず

古代のパンダについて知るにもまだ多くの問題がある。「獏」の解釈について後世に絶大な影響を及ぼした郭璞だが、『山海経』西山経(2)にもこの問題に関わる注を附している。

又西百七十里，曰南山，上多丹粟，丹水出焉，北流注于涓。獸多猛豹，鳥多尸鳩。郭璞云：猛豹，似熊而小，毛淺有光澤。能食蛇，食銅鐵。出蜀中。豹或作虎。

この「猛豹」に附した注は、色についての記載がない点をのぞけば、おなじく郭璞が『爾雅』の「獏」に附した注とほぼ同じである。郭璞は「猛豹」と「獏」がどのような関係にあると考えていたのだろうか。特徴の相似た二種の動物なのか、同種の動物に二種の呼称があるということなのか。それにしては「猛豹は獏とも言う」のひとことすらつけくわえていない。

この点については清の郝懿行も同様の疑問を抱いたようで、『山海経』のこの部分に疏を附して説明している。

猛豹，即獏豹也。獏豹，猛豹，聲近而轉。

「猛豹」と「獏豹」は同種の動物の異称であるというのが郝懿行の認識である。ふたつの郭璞注を両方信ずるに足る

と判断すればこのような結論にならざるをえないだろう。白樂天らが『山海経』に「獾」を見た、ということも、あるいはこのような事情によるものかもしれない。それだけ郭璞の影響がおおきかったということでもあろう。

『三才図会』にも同様の現象が見てとれる。『三才図会』の「猛豹」の項は以下のとおり。

南山有獸，名曰猛豹。似熊而毛彩有光澤，其食銅鐵。

『三才図会』は郭璞注『山海経』を継承したであろうと推測できる。『三才図会』は先にあげたように「獾」も独立して項目をたてているため、「銅鉄を食べる」という特徴をもった二種の動物がいるという形になっている。おもしろいのは、「猛豹」のほうはバクの特徴の「侵犯」をうけずに「熊に似ている」というパンダ本来の姿に近い記述をのこしていることである。

「獾」のそれから　　純化路線

ここでさらに清代の人の「獾」に対するイメージがうかがえる資料をみておこう。『説文解字』段玉裁注は「獾」についてこのように述べている。⁽²⁵⁾

獾 似熊而黃黑色，出蜀中。即諸書所謂「食鐵之獸」也。見《爾雅》、上林賦、蜀都賦注、《後漢書》。《爾雅》謂之「白豹」。《山海経》謂之「猛豹」。今四川川東有此獸。薪采攬鐵飯飯入山，每爲所齧。其齒則奸民用爲爲佛齒。

段玉裁は当時の博学の士であるが、その段玉裁が各種文献資料を精査したうえで、「食鉄之獸」を「獾」の別名とみなしている。この「獾とは食鉄獣のことである」が、当時の一般的な認識だったのであろう。

ところで段注は『爾雅』『文選』のほかに『後漢書』もあげている。しかし私の調べたかぎりでは『後漢書』には「獮」の字はあらわれない。段玉裁が「獮」の用例とみなしたと思われる部分にあるのは「獮」という動物である。⁽²⁶⁾もつとも「獮」は「獮」と音が似通っており（現代漢語普通話では同音）、この部分を「獮」とする『後漢書』があったとしても不思議はない。しかし段玉裁が（「獮」と書かれていたとしても）『後漢書』のこの部分を「獮」の用例として引用した理由とおもわれる要因はほかにもある。『後漢書』の注釈にはこの「獮」に対して『南中八郡志』⁽²⁷⁾という本が引かれている。ここに「獮大如驢、狀頗似熊、多力、食鐵、所觸無不拉」とある。この「食鐵」が「獮」と「獮」とをむすびつけたのではないだろうか。また、先に見たように『本草綱目』は「獮は獮とも書く」として、同じ動物をさす二種類の書きかたとみている。なお、『説文』に「獮」の項目はない。このことも『後漢書』の「獮」が「獮」の説解に引用された要因なのだろうか。

しかし、一方で段玉裁は明代までにひろく知られていたはずのマレーバク由来とおもわれる特徴を切り捨てている。六朝以来拡張をつづけていた「獮」イメージを郭璞まで「原点回帰」させたとも言えそうである。

同様の傾向は『康熙字典』⁽²⁸⁾にもみられる。『康熙字典』は「獮」にかかわるさまざまな用例をひいているが、マレーバク由来のものとおもわれる特徴はいつさいひいていない。白居易『獮賛序』を引用してはいるものの、「生南方山澤中」「圖其形辟邪」の部分のみである。「象鼻犀目、牛尾虎足」などは引用しない。これも意図的なものなのだろうか。しかし両書とも、「獮は食鉄獣である」ということについては信じてうたがわぬのである。

清代の二書の「原点回帰」にはなにか理由があるのだろうか。明代までには「獮」の特徴として定着していたマレーバク由来の特徴は信ずるに足らぬと判断したのであろうか。それとも清代にはすでにマレーバクと郭璞以来の「獮」とは実は二種の動物であったことに気づいたのであろうか。

中国古代「獾」の歴史

以上述べてきたことを簡単にまとめてみる。「獾」はもともとパンダを指していたが、のちにこの「獾」を記した文献にさまざまな注が附されたり新たな解釈がなされたりしていく過程で、誤って生じた特徴の「鉄を食べる」という部分ばかりが伝えられ、強調され、その他のごく普通の特徴を等閑視するにいたった。こうして「獾」は現実のパンダから離れていき、虚構の野獣へとその姿を変えたのである。さらにそこに別種の動物が、色彩が古文献中の「獾」とおなじであることから「獾」と称されるようになったことで、以前からの「獾」のイメージとあらたに持ち込まれた「獾」のイメージとがあわさり、ついに正体不明の動物「獾」を生み出すにいたった。

現在では「獾」はバク (Tapirus) のみを指すことばであり、パンダは「熊猫」である。冒頭で一九三四年版の『辞海』にある「熊猫」からはパンダを想起できるとはとても思えないということ述べた。この時期に「熊猫」という呼び名とパンダとがかならずしも一致していないのだとしたら、いったいパンダのことはなんと呼んでいたのだろうか。⁽²⁹⁾ そもそもバクとパンダの混用はいつまでつづいたのか。その混用の解消のきざしは清代にありそうであるが、混用が解消されて以降はこれら二種の動物はなんと呼び分けられていたのか、現在のような明確な区別はいつ確立したのか、など考察すべきことはおおい。

また、今回考察した「獾」「猛豹」以外にもかつてパンダをあらわしていたのではないかと推測されている呼称は多く、ここでひとつひとつ考察することはできない。「獾」と「猛豹」の関係で見ただけのように、数多くの呼称は決して「あちらをたてればこちらがたたず」といった関係にあるわけではない。「音が似ている」という原因や、同じ呼称でも地域によって発音がちがう、方言差がある、時代によって変化するなど、パンダが多くの呼称を獲得するさまざまな要因が考えられるであろう。郭璞の「猛豹」、『字林』の「白豹」のほか現代の研究者は「獾」「白熊」「致夷」⁽³⁰⁾などをあげ

る。これらはどれもパンダの古称だった可能性がある。本稿ではまず「貌」に注目して考察をすすめたが、これらすべての呼称についても同様に過去にパンダを指していた可能性があるのか否かを確認していく必要がある。そうしてはじめて古代文人のパンダに対するイメージを知ることができるのである。

注

(1) 余談であるが「大熊猫」の「大」は「Giant Panda」の「Giant」の部分の訳であると考えられる。英語では「Lesser Panda」との区別の必要から「Giant Panda」と呼ばれる。漢語でも「Lesser Panda」は必ず「小熊猫」であるが、「Giant Panda」のほうは「大熊猫」「熊猫」後述するように「猫熊」などの呼称が混在している（私の見た限りでは「熊猫」が優勢であるようだ）。日本語では「Lesser Panda」は「レッサーパンダ」と呼ぶが、「Giant Panda」を「ジャイアントパンダ」と呼ぶことはまれで「パンダ」と呼ぶことがおおいように見うけられる。日本語で「ジャイアントパンダ」と呼ぶのが「パンダ」と呼ぶ方が指す動物はおなじことで、なんらかわることはない。本稿では「Giant Panda」の日本語訳として、人口に膾炙した「パンダ」のほうをもちいることにする。

(2) これはダヴィド神父とエドヴァール氏がジャイアントパンダとレッサーパンダを同系統とみなしたためである。現在ではジャイアントパンダとレッサーパンダは同科ではないとされている。

(3) 『広辞苑』第五版（岩波書店 一九九八年）も「二八六九年に生存が確認された」としている。

(4) DICTIONARY OF American Biography, Supplement Three 1941-1945, Edward T. James, Editor, Charles Scribner's Sons, NEW YORK 1973, p.667-669

(5) ダヴィド神父が地元の人に聞いた名は「白熊」であったという。

(6) ここではおもに吳斌《中国大熊猫发展史新探》（四川师范学院学报（自然科学版）第二三卷 第一期 二〇〇二年三月）、姚学良 廖远安《大熊猫衰滅之迷》（四川地质学报）第二一卷 第二期 二〇〇一年六月）を参照した。

(7) 「駁」の古漢語における意味は、『漢語大字典』（四川辞書出版社・湖北辞書出版社 一九八六年）によると「①馬の毛色が一樣でないこと」「②色が一樣でないこと」「③入りまじっていること」などである。①の用例として『爾雅』釋畜の「駟白駁」

の邢昺疏「孫炎曰『驪、赤色也。』謂馬有驪處有白處者曰駁」をあげている。これによれば、「駁」の一字ではかならずしも実際にパンダのような配色をさすわけではない。この文字情報からシマウマのようなシマ模様を想像する人もあるだろうし、ヒョウのような斑点模様をおもいえがく人もあるかもしれない、いろいろな読みかたができるのではないだろうか。

(8) ただし色の言いかたが異なる。

(9) パンダをクマ科と離れた特徴を持つ動物とみなし、別に「パンダ科」をたてる考えもあるようだが、ここではパンダは遺伝的にも骨格の面でもほかのクマ科動物からそれほどかけはなれた存在ではない、という近年主流の意見を参考にする。参照遠藤秀樹『パンダの死体はよみがえる』ちくま新書 二〇〇五年

(10) 阿波「竹箭与熊猫」『文史雜誌』二〇〇一年第一期(総第九一期)二〇〇一年一月 六〇—六一ページ

(11) 参照『中国史綱要(修訂本)』人民出版社一九五五年(第二版)

(12) 『李善注文選』(清嘉慶十四年胡克家校刊) 中華書局影印 一九七七年

『六臣注文選』中華書局影印 一九八七年

(13) 『百子全書』(浙江古籍出版社影印 一九八八年) 所収

『神異經』一卷 漢・東方朔の撰と伝えられるが、偽作である。また、晋・張華の注も偽作とされる(『大漢和辞典』修訂版大修館書店 一九八四年)『中国学芸大事典』大修館書店 一九七八年)『四庫全書総目提要』も東方朔撰、張華注ともに彼らに仮託したものであって偽作、と断ずる。書かれた時期については『隋書』経籍志にすでに東方朔撰、張華注として『神異經』が記載されていることや、「觀其詞華綺麗、接近齊梁」という特徴から、「六朝の文士」が書いたであろうと推測している。

(14) 『太平御覽』(中華書局影印 一九八五年) 卷九百八・獸部・第二十・獮

(15) 『天中記』(台湾・文海出版社影印 一九六四年) 卷二十五「驪牙」にも『抱朴子』からの引用として「東方生啖鐵之獸、實頼大荒之籍矣」という一節が引用されているが、欽定四庫全書(文淵閣) 電子版『抱朴子』にはこの文はみあたらない。

また電子版四庫全書にはこのほかに

『蜀中広記』卷五十九「東方識啖鐵之獸。寔頼神禹之書、大荒之籍矣」

『広博物誌』卷四十八「東方識啖鐵之獸。實頼神禹之書、大荒之籍矣」

という、類似した文がある。

- (16) 『白氏長慶集』(文学古籍刊行社 一九五五年)・『白居易集箋校』(上海古籍出版社 一九八六年)
- (17) 黄伯思『東觀餘論』(中華書局 一九八八年)
- (18) 現在見られる『山海経』には「獏」の項目はたてられていない。かつて「獏」の項目をたてていた『山海経』があり、それを白楽天らが参照したもののちに失われたとも考えられるが、『山海経』にはそもそも「獏」の項目がたていなかったとしても、『山海経』から「獏」は「食鐵與銅、不是他物」という動物であるという印象ができる余地はある。この件については後述。

(19) 欽定四庫全書(文淵閣)電子版『本草綱目』上海古籍出版社

(20) 『三才圖會』台湾・成文出版社影印 一九七〇年

(21) 獏②では、「獏」を「獸名」とだけ説明し、その後に『爾雅』本文とその郭璞注、邢昺疏が引用されている。古文献に見える「獏」は現在の「獏(バク)」とは異なる、正体不明の動物とみなしているのだろう。

(22) 厳密に言えばこれはマレーバクである。現在世界に生息する四種類のバクのうち、白と黒の模様をもつものはマレーバクのみである。また、アジアに生息するものもマレーバクのみである。よって、中国人が「獏」とみなした動物はこのマレーバクであると考えるのが妥当であろう。現在のマレーバクの生息域はマレー半島、スマトラ島、ミャンマー、タイである。『中国大百科全書』(中国大百科全書出版社 一九九一年)「生物」には「中国南方の更新世の地層からバク属の化石が出土した」(二〇〇五ページ)とあり、更新世期にはその生息域は現在の中国の領域内にまでおよんでいたとおもわれる。また、林巳奈夫『神と獣の紋様学 中国古代の神がみ』(吉川弘文館 二〇〇四年)では三門峽市出土の「青銅獸豆」など、西周期の青銅器のいくつかの「獸面紋」「獸形」はマレーバクをかたどったものではないかと推測している(二一六―二一八ページ)。しかし実際に黄河流域からマレーバクの骨などが出土したなどの物証はあげていない。マレーバクの生息域の縮小とその時期についての詳細な調査は未見。今後精査する必要がある。また、どの時期から「バク」に「獏」の名が与えられたかについても調査の必要がある。

また荒俣宏前掲書では「獏」は中国の想像上の動物であり、その想像には「東南アジアに生息するマレーバクに関する虚実入り乱れた情報から中国の獏が生まれた」と記している。つまり荒俣氏はバクは古代の中国にはいなかったと考えているらしい。その想像上の「獏」が日本に伝わったわり、「夢を食べる動物」に変化したと述べている。私は本文で述べるように先にパンダに

由来する想像上の動物「獾」があり、そこに「バク」の印象が加わったと考えているので、この点では荒俣氏の見解とはことなる。

(23) 『山海経注疏』巴蜀書社 一九九六年

(24) 『説文解字』段注も『山海経』の「猛豹」は「獾」のことであると書いている。この判断もあるいはおなじ理由によるものかもしれない。

(25) 『説文解字注』上海古籍出版社 二〇〇一年

(26) 『後漢書』(中華書局 一九八七年) 卷八十六・南蠻西南夷列傳第七十六・西南夷

哀牢人皆穿鼻儻耳，其渠帥自謂王者，耳皆下肩三寸，庶人則至肩而已。土地沃美，宜五穀，蠶桑。知染采文繡，罽毼帛疊，蘭干細布，織成文章如綾錦。有梧桐木華，績以爲布，幅廣五尺，絮白不受垢汗。先以覆亡人，然後服之。其竹節相去一丈，名曰濮竹。出銅、鐵、鉛、錫、金、銀、光珠、虎魄、水精、瑠璃、軻蟲、蚌珠、孔雀、翡翠、犀、象、猩猩、豹獸(注)雲南縣有神鹿兩頭，能食毒草。

(注) 鄭元水經注曰：(中略)：南中八郡志曰：「豹大如驢，狀頗似熊，多力，食鐵，所觸無不拉。」廣志曰：「豹色蒼白，其皮溫煖。」

このような例があることを考えると、文献にのこる「豹」がさす内容もひとつひとつ検討をしていかねばならないが、『山海経』「豹国」のように、「豹」が動物名ではなく民族(人のグループ名)としてあつかわれるなど、その意味は一樣ではない。「豹」は使用例が大量にあり、本稿には考察が間に合わなかった。今後の課題としたい。

(27) 未見

(28) 『康熙字典』(康熙四十九年刊／中華書局影印 一九五八)

(29) そもそも民国期のパンダの正式な呼称は「猫熊」であり、その時期にのこされた右書きのラベルがのちに左書きに誤読されたために「熊猫」の呼称が生じた、との説もある。台湾では「猫熊」の呼称が優勢であるからその誤読が生じたのは共産党解放区ないしは共産党の解放後であるとの説もある。これらの説によると「熊猫」の誕生は四十年代ということになるが、『辞海』にあるように「熊猫」の呼称は一応三十年代にはすでに存在している。

(30) これらの名称は『詩経』『尚書』『史記』などに見られ、これらを古代中国のパンダ記載であるとかがえる研究者もいるが

(注四にあげた二論文など)、それらの資料ひとつひとつに対する考察がまだ不十分である(これらが「パンダである」と考えた理由が不明確。また、かりにあるところで「白熊」がパンダであるらしいと推測できたとしても、他の資料にある「白熊」がおなじ動物をさしているとはかぎらない、など)。